

愛する御子の支配下に

コロサイの信徒への手紙 1 : 1 - 14



司祭 ヨハネ 井田 泉

聖霊降臨後第5主日

2025年7月13日

聖光教会にて

今は参議院議員選挙の真っ最中です。その中で非常に気がかりなことがあります。それは「日本人ファースト」などと言って、外国人を排斥する声が高まっていることです。これは大変危険なことです。

今日の福音書の中でイエスは「サマリア人」のことを言われました。追いはぎに襲われて半殺しにされた人を助けたのは、祭司ではなくレビ人でもなく、外国のサマリア人であった。サマリアを外国と言うてしまうのは言い過ぎになるのですが、しかし詳しい事情はともかくとして、当時、ユダヤ人はサマリア人とは絶交状態。ユダヤ人からすればサマリア人は軽蔑と憎しみの対象だったのです。そのサマリア人を、「神の律法に従って隣人を愛した人」としてイエスは語られた。「ユダヤ人ファースト」ではありません。イエスは、サマリア人とユダヤ人が一緒に生きていく道を開かれたのです。わたしたちはこのイエスに倣う者として、「日本人ファースト」の排他主義、排外主義ではなく、一緒に生きていく道を選ばなければなりません。

今日は、使徒書のコロサイの信徒への手紙に耳を傾けることにしましょう。先ほど読まれたのは冒頭の 1 節から 14 節でした。ここでパウロはコロサイの教会の人々のために祈っています。

「わたしたちは、いつもあなたがたのために祈り、わたしたちの主イエス・キリストの父である神に感謝しています。」

1:3

ふと昨夜思い出しました。遠い昔、わたしの学生時代のことです。神さまを見失って苦しんでいたわたしは、何とか救いを見出したいと、もがくようにあちこち聖書をめくっていました。そしてたまたまこの箇所が目にとまり、「パウロがわたしのために祈ってくれている」と感じて、とても慰められた。奇妙な読み方かもしれませんが、こういうこともまた、与えられた恵みだと思います。

コロサイは、今のトルコの内陸部の町です。パウロは、コロサイの教会のために祈りつつ、「感謝しています」と言います。パウロはこのコロサイに行ったことはなく、また特別コロサイの信徒から世話になったというわけではありません。それなのに何が感謝なのでしょう。

「神に感謝しています。あなたがたがキリスト・イエスにおいて持っている信仰と、すべての聖なる者たちに対して抱いている愛について、聞いたからです。」1:3-4

会ったことはなくても、コロサイの教会の人々が信仰と愛によって生きていると聞いたことがこの上なくうれしい。そのゆえに神に感謝する。これが伝道者の思いです。

「あなたがたは、この福音を、わたしたちと共に仕えている仲間、愛するエパfrasから学びました。」1:7

エパfrasはパウロからイエス・キリストの福音を聞き、心

を燃やされて故郷のコロサイに帰って伝道した。こうしてコロサイの教会が始まり、発展していきました。

そこまではよかったのですが、しかし今、非常に困った事態がコロサイの教会に起こっている、という話が伝わってきています。実はパウロもエパfrasも今、獄に捕らわれていて、直接コロサイに行って問題の解決に当たることができません。そこでパウロは祈りつつ、心を込めてコロサイの教会の人々にこの手紙を書いたのです。

どういう問題がコロサイの教会に起こっていたのでしょうか。それは2章を読むとわかるのですが、間違ったことを信徒に教える有力者たちがいて、その結果信仰がずれてしまい、肝心の「イエス・キリスト」が曖昧になってしまっている、ということです。

たとえば、何を食べてはいけないとか、どの日は何かをするのに良いとか悪いとか、そういったあれこれが強調される。しかしキリストの福音は本来、そうした考え方・生き方から解放するものだったはずです。

さらに、コロサイの教会では天使礼拝が盛んになっているという。天使が宇宙の秩序を支配し、人間の運命を左右するということです。とんでもないことです。天使は神に仕える僕であり、人を助ける存在であって、天使を拝むなどあってはなりません。

心配なことに、コロサイの信徒はこうした教えに影響されて、救い主イエス・キリストを見失ってきている。それでパウロはこの手紙の中で、「キリスト」という言葉を繰り返し強調しました。

そこでわたしたちが知りたいのは、キリストの福音とは何か、パウロはここで何と語っているか、です。今日のコロサイ書日課の最後の方に、それが語られています。わたしたちもそれを聞きましょう。

「御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。わたしたちは、この御子によって、^{あがな}贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。」

1:13-14

特に 13 節を丁寧に確かめてみましょう。

第 1 に、「御父は、……してくださった」と言われています。神が何かをしてくださった。わたしたちに必要な救いのわざを、神が決定的に実行してくださった。これが大事です。キリスト教は、わたしたちが何かを考え何かを行うことから出発するではありません。神がわたしたちのために大事な何かをしてくださった、行動してくださった、ということが出発点であり土台です。これが曖昧になっているのは、今の日本の教会も同じかもしれません。

第 2 に、「わたしたちを」です。神は相手を考えずに、むやみに行動されたわけではありません。わたしたちに目標を定めて、わたしたちのために、わたしたちを救うために行動された。

第 3 に、「(御父は、わたしたちを) 闇の力から救い出」された。わたしたちは元々安全安心な場所にいたわけではありません。神の救いなど必要としないような者だったわけではありません。わたしたちは闇の中にいた。闇の力の中に捕らえられていた。しかし神はわたしたちを愛されたので、わたしたちが闇の力の中に呑み込まれたり、闇の力の道具になってしまったりするのを許されなかった。神はわたしたちを闇の力から救い出された。わたしたちを解放してくださったのです。

主イエスの十字架の場面を思い出しましょう。あのとき、全地は暗くなった（マルコ 15:33）。イエスはあの十字架において闇を経験された。それによって世界とわたしたちの闇を引き受けて死に、わたしたちを闇から救い出されたのです。

「闇の力から」と言われていますが、そこから解放されてどこへ行くのでしょうか。「(わたしたちを闇の力から救い出して、) その愛する御子の支配下に移してください」った。神は、わたしたちを「闇の力」から「御子の支配下」に移してくださった。わたしたちは、闇の勢力圏から光の勢力圏に移されたのです。

「御子の支配下」とは何でしょうか。神の御子イエス・キリストが力を持って守り、導かれる世界です。あの羊飼いと羊の譬えを思い出しましょう（ヨハネ 10:14）。羊飼いなる御子イエスは、羊であるわたしたちを愛し、守り、養い、導かれる。わたしたちは失われた者ではなく、羊飼いによって見出された者です。わたしたちは放置された者ではなく、羊飼いイエスによって保たれ支えられている。これが「御子の支配下にある」ということです。

わたしたちはなお、内と外から闇の力に攻撃され、脅かされます。しかし根本的には、御子の支配は、十字架によって、わたしたちのために確立しているのです。

イエスの力強い両手が、わたしたちをしっかりと守っていてくださる。イエスのもとに引き寄せられたので、イエスの声が聞こえる。イエスのまなざしがわたしたちを温かく見つめてくださるので希望が湧いてきます。そしてイエスの願いと祈りがわたしたちに浸透してきます——み国が来ますように。み心が天に行われるとおりに、地にも行われますように。

わたしたちは御子の支配下にある。イエス・キリストの愛の力のもとに守られている。そのイエス・キリストの愛の力に動かされて、わたしたちもあのサマリア人のように人を大切に思

って歩むのです。

祈ります。

神さま、わたしたちがすでに御子イエスの愛の支配のもとにあることを教えてください。わたしたちをこの世の恐れや間違った価値観から解放してください。イエスの願いがわたしたちの願いとなりますように。この地上に主の愛のみ心が実現するために、わたしたちを用いてください。アーメン